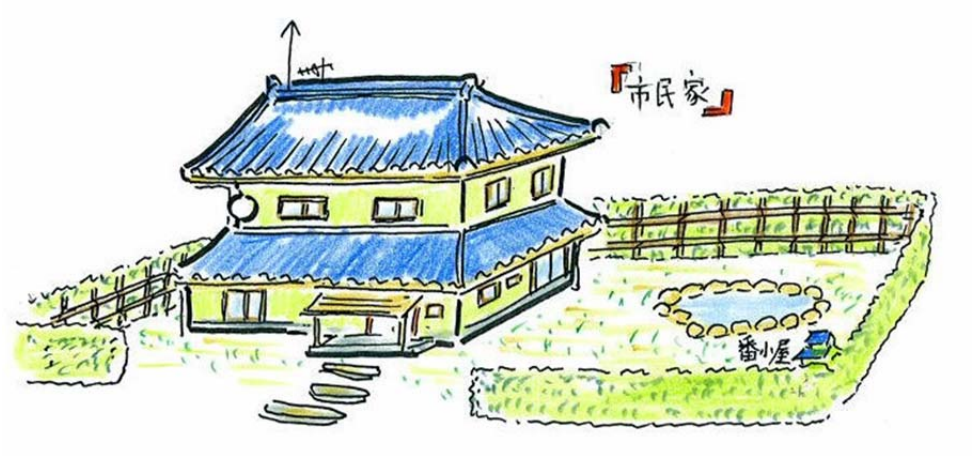
✦✦支援くんの火災予防奮闘記✦✦

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。

　そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

　点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！

援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

<u>主な登場人物</u>

援ちゃん　5歳

支援くん　　ご助（中間）

ミーちゃん（飼い猫）

ママ

パパ

閻魔様

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.27

お屋敷の点検を終え、番小屋の炬燵(こたつ)で一息ついておった拙者は、庭の方から聞こえる姫様とご助の楽し気な声に気づき、声のする方へと向かったのでござる。

大寒を過ぎたとはいえ、連日の気温が０度以下の日が続いておりますれば、この寒さの中、姫様とご助は何をしておるものかと、お屋敷の背戸(せど)（意：裏口）に積もった雪山を目指したのですじゃ。

半刻（１時間）かけ、雪山の頂上に着いた拙者は、遠眼鏡（とおめがね）（意：望遠鏡）であたりを注意深く見渡したのじゃが二人の姿は見当たりませなんだ。

「おかしいのぉ・・・確かに声は聞こえておったのじゃが・・・」と独り言を言いながら、拙者は雪山をお屋敷に向け、踏み固められた雪道の上を下っていったのじゃ。

やがて下りきる頃のことでござった。不意に背後から

「いくじょご助。」と姫様の声が聞こえたのじゃ。

「やれやれ、後ろにおいでじゃったか・・・」と肩越しに後ろを見ると・・・

そこにはゴム長靴にプラスチックの板を着け、２本の棒を持った姫様が立っておりもうした。

「姫様ぁ・・・」と声をお掛けした次の瞬間

「ちょれーぇ」と姫様は雪山を滑り降りたのじゃ。

「ひぃいぃ？・・・な、何をなされて？！」と迫りくる姫様へ拙者は声を掛けたのじゃ

「あっ？ちえん！にゃんでいりゅのぢゃ。逃げよ！」と姫様は言われるが、踏み固められた雪道の両側は拙者の背丈を超える雪の壁・・・拙者には雪道をひたすら駆け下りる道しか残されておらんかった。

「ひいいいい」との無情の叫びを打ち消すように

ザザザザザっと迫りくる板の音に微かに混じるのは・・・

「いひひ、いひひひぃぃぃ」というご助の声でござった。

「お、おのれご助めっ」と叫んだものの、ザザザッと背中を大きな板で踏まれ、拙者は気を失ったのでござる。

「いっ、痛たたっ・・・」どれほどの時間が経ったのじゃろうか、拙者が目を覚ますと傍らには姫様とご助の姿があった。

「あ、ちえん、目が覚めたのか？」と姫様。

「あいてててて・・・目が覚めたのかじゃないですよ。何なんですかあれは？」と聞くと

「しゅきー（スキー）じゃ。こんど幼稚園でしゅきー（スキー）場に行くからさぁ、練習してたの。」と言う姫の傍らで、

「ちっ、もう気づいちまったんですかい？」と餅を頬張りながらご助が。

見れば、練炭の上で焼いた餅に手を伸ばしておった。

「こ、このぉ・・・ご助！貴様は拙者を踏みつけにしながら『いひひ、いひひひぃぃぃ』と笑うておったじゃろ！」ときつく問いただすと

「そ、そりゃ違いますぜ旦那様。あっしは姫様に『旦那様を轢いてしまいますぅ・・』て大声で伝えていたんですぜ。それが旦那様には『いひひ、いひひひぃぃぃ』と聞こえたんでさ。」と、ご助は餅を頬張りながら更に網金の上の餅に手を伸ばしておった。

「まあ目が覚めて良かったにょ。ここはパパが作ってくれたかまくらの中じゃ。ほれ、ちえんもコッチに来てお餅をたべにゃさい。」と姫様に言われ、痛む首をさすりながら姫様の側に座ったのじゃが・・・網金の上に餅の姿はなかった。

「餅は・・・どこに？」と姫様にお聞きしたのじゃが、

「あれ？旦那様も食べたかったですかい？でもこれで最後ですじゃ。」とご助は答えると、手にした最後の餅を、まだ餅で一杯の口にねじ込んだのじゃ。

「お、お、おのれという奴は！どこまで意地汚いのじゃ！！」と拙者は怒りに任せ、リスのように餅で頬を膨らませたご助の胸倉を掴んだのじゃ。

そうしたら、ご助の奴め、「うぐぐぐううう・・・」と一声あげると目を白黒させながら倒れおった。どうやら喉に餅を詰まらせたようじゃ。

「天罰覿面（てんばつてきめん）（意：悪事の報いが直ぐに現れること。）じゃ。」とそのまま捨て置くことも考えた拙者ではござったが、そこは固い主従の絆。

「ご助！しっかりするのじゃ！」と、背部叩打法、ハイムリッヒ法、逆さ吊りと試してみたがご助の喉の餅は容易にとれんようじゃった。

「こ、こうなったら・・あれじゃ。」拙者はお屋敷から掃除機を持ち出すと

『ウイイィン・・・』溝用のノズルアタッチメントを装着してからご助の肩を握ったのじゃ。

その時でござった。

『ゴックン』とご助の喉がなると、気を失っておったご助が目を覚ましたのじゃった。

「ごほほっ、ごほっ」とむせ返るご助に

「だ、大丈夫かっ」と拙者は心配して声を掛けたのじゃが、ご助の馬鹿が

「な、何しやがるんでぃっ！さっきから背中をどついたり、胸を突いたりと・・・痛ぇじゃねぇですかい！」と怒り出したので

「何をじゃと？そちを助ける為ではないか。」と叱りつけましたところ

「て、てやんでぃ。あっしは食いすぎた餅が上がってきたもんで出してたまるかと口を塞いでいただけなのに、そ、掃除機まで持ち出しやがって・・・出してたまるかいっ」と逆切れいたしましたのじゃ。

「そ、そおゆうことか・・・お、おのれは・・・心配かけおってからにぃ・・・」怒りで拙者の顔が鬼の形相に代わるのを見て取ったご助は

「だ、旦那、いや、旦那様、支援様・・・。い、言いすぎやした、それに餅はほれここに。」と懐から焼く前の餅を数切れ取り出すと

「さ、さ・・・直ぐに焼きますからねぇ・・・」と網金の上に並べはじめたのじゃった。

その姿に　プッツーン　と拙者の堪忍袋が切れ

「ゆ、許さんっ。」と飛び掛かったのでござる。

それから如何ばかりの時が過ぎたのじゃろうか。

拙者がご助の詫びを受け入れた頃には日はとっぷりと暮れ、拙者らの喧嘩を見飽きた姫様のお姿はなくなっておった。

「だ、旦那様。もう意地汚い食い方は致しませんから。」素直に頭を下げるご助。

「うむ、頼むぞ。しかし喧嘩したら腹が減ったのぉ。」という拙者に

「へへへ、餅が焼けた頃じゃねぇですかい。」とご助。

「そ、そうじゃな餅があったな・・・あん？アッ、も、餅が大変じゃ！！」

拙者達が見ると、ユラユラと練炭の上で炎が踊っておった。炭化した餅が燃えていたのじゃった。

そして、その炎にあぶられたかまくらの天井からは　『ポタポタ、ポタポタ』と大粒の水滴がしたたり落ちて、かまくらの床に溜まっていた。

「ご、ご助・・・これは危ないのと違うか。」とご助をみやると、すでにご助は出口に向け、ソロリソロリ　と逃げ出しておった。

「しゅ、主人を置いて逃げるとは、なんとおのれという奴は・・・」と更に

続けた拙者の大声は

「うわあぁぁぁ・・・」というご助の叫びとともに

ドドドドドド・・・と崩れ落ちる雪塊の音に飲み込まれたのじゃった。

（おわり）